令和５年度第２回　史跡小田原城跡御用米曲輪戦国期整備検討部会会議録

日　　時：令和５年 10 月 16 日（月）午後１時 30 分～午後４時 00 分
会　　場：おだわら市民交流センター　UMECO　会議室５・６
出　席　者：小野部会長、中島部会員、髙妻部会員、宮内部会員
オブザーバー：神奈川県教育委員会文化遺産課　冨永副主幹
　　大分市教育委員会文化財課　坪根氏、五十川氏
コンサルタント：（株）文化財保存計画協会　山田研究員
事　務　局：湯浅課長、小林副課長（史跡整備係長）、
　　佐々木副課長（埋蔵文化財係長）、大島主査、加藤主任、伊藤主任
　　経済部小田原城総合管理事務所　清水所長、諏訪間主査
　　建設部みどり公園課　山崎係長

【開会あいさつ】
【資料の確認】
【会議の公開について】

議事

部会長
それでは、本日の議事に入る。本日、審議内容としては１つだけなので簡単そうだが、実はあまり簡単ではないのではないかという話である。発掘現場の担当者の方から結構遺構が複雑だということは伺ったが、そうなると、やはり現地で議論してお互いに確認し合うことが必要だと思う。そのような細かい内容については、ここで了承ということではなく、丁寧にお互いに確認して議論したい。また、大分市から来られたお２人には、それぞれ発掘のプロなので、何か気がついたことがあったらご意見を述べてもらいたい。それでは事務局から遺構についての説明をお願いしたい。

報告事項　ア　御用米曲輪戦国期整備に係る遺構について（資料１）
資料１に基づいて事務局説明
前回の部会で戦国面の整備にあたり、どの面を整備するかを検討するために、戦国期の遺構が何面あって、その関係性についてはどうかというご指摘をいただいた。今回、その戦国期の遺構の情報を整理したレイヤー図を作成した。対象とした遺構は、概要報告書作成時に検討した戦国期の変遷の第４面から第６面を中心とした一方で、戦国期第３面から後と第７面より前の遺構を除いている。なお、第７面で検出した掘立柱１棟については、他遺構との新旧関係が不明確であるため、今回ここでは対象に入れた。今表示

させているのが、概要報告書作成時に検討した戦国期の変遷についての模式図になる。次の図が色分けをした図になる。１－１遺構情報整理図と色分けの関連は下記の通りである。青色は今回対象とした戦国期第４面から第６面の遺構からピックアップしたものである。赤色は戦国期第３面から後の遺構である。緑色は戦国期第６面以降の遺構に切られている第７面より前の遺構になる。わかりやすいように、ここでは塗りつぶして表示している。黒色で表示している遺構については、現状では遺構の位置付けが不明瞭である土坑やピットである。次に、前回部会で指摘があった石組水路などの区画となりうる遺構を抽出した。石組水路のほか、溝、堀を抽出したものが次のページになる。次に遺構の内容や重複関係などを説明するために、抽出した石組水路などを基準に便宜的に区分けを行った。今後の説明では、南西方向を南側、北東方向を北側として説明する。まず、南側については、石組水路などを基準として区分けをしている。北側については、現況では詳細は不明瞭だが、石組水路や堀が集中する範囲があることから、そこに何らかの区画があるものと想定して分けている。また、北側の南北軸については、検出している石組水路や溝のうち、南北方向に伸びているものがあった。それを基準として分けている。なお、北側については、今後の調査成果を考慮した検討が必要と考えている。北側の区画については、概略のみの説明とする。次に、成立した条件で対象とした遺構をモデル化して遺構の切り合い関係を基に上層と下層に分けた。これらの遺構の状況について、今提示している区画ごとに主に遺構が重複関係にある区画について説明する。最初に、区画Ａ、Ｂ周辺である。１番西の調査区の下層では、東西方向に伸びる石組水路を検出していて、そこの石組水路より南側で、玉石敷が広く展開している。また、礎石建物の一部も検出している。同じ調査区の上層では、下層で示した礎石建物を切る形で下層の礎石建物とは異なる軸方向の礎石建物が展開している。中央の調査区では、遺構の重複関係は確認できない。次に、Ｃ、Ｄ、Ｇ、Ｈの調査について説明する。この図で表示している範囲の中央部を現在調査中である。特徴として挙げられるのは、東側の調査区と南側の調査区では、硬化面が広く展開している。この硬化面は、重層的に構築されている箇所があることが確認されていて、検出面には時期差があるのだが、想定も含め硬化面が検出された範囲を今塗りつぶしている状況である。継続して広場として利用された可能性が考えられる。１番南側の調査区では、硬化面の上に砂利敷きが展開している。何らかの遺構を構成しているものであるかは不明である。ここまで主に北側の概要を説明したが、各調査区の検出遺構の相互関係については、現在調査中の範囲及び今後の調査範囲も含めて検討が必要と考えている。次に、南側調査区について説明する。区画Ｅ、Ｆの範囲では遺構の切り合い関係は確認できない。区画Ｅについては、第３面で建物があったことから、対象としている面の遺構の展開は不明瞭である。玉石敷が検出されており、この面に伴うものであることが分かっている。区画Ｆについては、近世の遺構で壊されており、詳細は不明である。現在調査中の範囲については、南側の石組水路の延長と近世の攪乱を確認している状況である。続いて、区画Ｉ、Ｌに

ついて説明する。区画Ｉについては、遺構の切り合い関係から上層下層に分けている。区画Ｉの下層では、玉石や砂利敷きの他、掘立柱建物を検出している。石組水路の壊れた部分と重複をしているが、この壊れた部分は、第３面以上の遺構によるものである。掘立柱建物は、この壊れた部分のさらに下層で検出している。そのため、掘立柱建物と石組水路の明確な前後関係は不明瞭だが、共存していた可能性もあることから対象とした。区画Ｉの上層では、この掘立柱建物を切る形で、かわらけ廃棄土坑を検出した。かわらけは、16 世紀後半のものが主体である。また、 区画Ｉの南側では、東西方向に延びる方形竪穴を検出している。この方形竪穴は石組水路を壊す形で展開しているが、方形竪穴からは、16 世紀後半の大窯Ⅲ期の遺物が出土していること、先ほどのかわらけ廃棄土坑のかわらけと同時期であることから対象としている。さらに、南側の区画Ｌについては、遺構の切り合い関係が確認できていない。区画Ｌでは、南北方向に伸びる溝をまたぐ形で掘立柱建物を検出している。この南北方向に伸びる溝の北端の部分では、石の樋と見られる石材を検出している。次に区画Ｊについて説明する。この区画では、北側の石組水路の石が玉石から切石に変わる場所がある。ここも１つの区画の境として考えている。一連の石組水路のように見えるが、ここで玉石から切石に変わる。そのため、石組水路などによる明確な区画はないが、Ｊ及びＪダッシュとしている。また、Ｊダッシュの東側についても石組水路による区画は不明瞭だが、広く近世の攪乱を受けている状況ではあるので、切石敷きと砂利敷きの空間の境となっていることがこの空間の境となっていることが想定される。部会長の復元想定図の中で、築山があった可能性を指摘いただいていることから、何らかの区画があったことが想定されるので、ここで分けている。まず、区画Ｊについては、 遺構の切り合い関係は確認できていない。北側と南側で礎石建物を検出している。南側の建物については、一部の礎石とそれを抜き取った穴を確認している状況である。次に区画Ｊダッシュについて説明する。区画Ｊダッシュについては、遺構の切り合い関係から上層下層に分けている。Ｊダッシュの下層では、大型の礎石建物とその南で２棟の礎石建物を検出した。２棟の礎石建物のうち西側のものは小型で、建物の南側に排水路と考えられる切石敷きと石組水路を伴うため、湯屋であったと想定している。また、そのそばで切石で化粧された井戸を検出している。切石で化粧された井戸は、御用米曲輪では今のところこの井戸のみである。この区画で最初に説明した区画ＪとＪダッシュの境としている玉石で作られた石組水路と切石で作られた石組水路の境が、大型の礎石建物の建物範囲とほぼ一致するのではないかと考えている。これら３棟の礎石建物は、建物の配置から一連のものであったと考えている。建物の東側には、区画Ｊの北側の切石の石組水路から続いた切石敷き遺構が展開している。一方で、区画Ｊの上層になると、大型礎石建物の南側に隣接していた礎石建物が掘立柱建物に改修される。これは、礎石が動かされて柱穴が掘られていることから分かっている。この掘立柱建物の北側には、ほぼ軸方向の一致する石組水路が位置しており、雨落ち溝などであった可能性が考えられる。湯屋と想定される礎石建物の北側には、東

西方向に伸びて途中で底石がなくなる石組水路 や、南北方向に伸びる石組水路、砂利敷きが展開している。これらは、底石がない石組水路の範囲や、南北方向の石組水路の南側、砂利敷きがない範囲には建物が展開してきたといったことが想定される。このことを総合すると、大型の礎石建物の南側に隣接している礎石建物が掘立柱建物に改修された際にその規模が縮小されたことで、一連であった３棟の建物に不整合が生じて、それを解消するために湯屋と想定される建物が北東の大型の礎石建物に向かって拡張されたのではないかという可能性を考えている。これが、この全体の中で、上層、下層の中で大きな変化の１つと考えている。次に、区画Ｋについて説明する。区画Ｋについては、砂利敷きの空間に井戸を伴う掘立柱建物があり、その東と南に池が位置している。区画Ｋの下層では、堀からの水が１号池、２号池と流れて、２号池は水面が高い状態であったことが考えらる。井戸から伸びる石組水路は、掘立柱建物の下を通って、その出口を２号池の切石との境で検出している。暗渠になっている。２号池の北側では２基のピット、南側では土坑を検出している。区画Ｋの上層では、１号池や堀は砂利で埋められた状態になる。２号池では州浜が作られ、池の水は、下層の段階に比べ少なくなったと考えられる。州浜がある場所へは水が流れ込んだ状況は確認できなかったので、先ほど説明した掘立柱建物の下を通る暗渠の石組水路については、州浜の段階では機能していなかったことが考えられる。これが大きな変化のある場所になる。次に、区画Ｍについては、今のところ遺構の切り合い関係は確認されていない。ここまで各区画について説明したが、これらを統合すると次のようになる。下層の段階、上層の段階になる。問題となるのが、区画Ｉ、区画Ｊダッシュ、区画Ｋになる。今回、遺構の切り合い関係から上層と下層を分けたが、上層下層それぞれそのものが全て同時期というわけではない。どちらにすれば、面が全て同じ、必ずしも揃うという状況ではないというのが現況である。この状況の中で、どの面を整備していくかということを検討していきたいと考えている。遺構の情報整理については以上である。

部会長

ありがとうございました。確認したいのは、各地区ごとに上層下層ということで切り合い関係から説明してもらったが、最後のまとめのところで言われたように、地区を超えて上層は同じとか下層が同じという、そういう意味ではないと、そのような理解で良いか。その地点において、単なる切り合いとして上層下層となったということで良いか。

事務局

そのとおりである。

部会長

理解した。ありがとうございます。ただいま、概要について報告をしていただいた。細

かい遺構については現地でやらざるを得ないと思うが、まず、大変綺麗な模式図を作ってもらったので、全体が把握しやすくなったと思う。質問でも、あるいはコメントでも、何かあったら出してほしい。溝で繋がってるところや礎石、あるいは掘立柱建物に大きな変化が見えるところというのは、割と遺構として確認しやすいと思うが、１番の問題は、結局それがない硬化面とか砂利敷きの遺構をどうやって、中心にあるその復元の面になりそうな庭園部分も含む遺構へ持っていくかだと思う。それと整合させるかということだと思うが、その辺では何か大きな進展があったか。

事務局

今のところ、建物に関係するところについては、かなり押さえられているが、それ以外のところについては、不明である。

部会長

もう１つは、他の委員やオブザーバーの方からも意見を求めたい。最初のところで区分けしてくれたように、空間を切っているはずだということを前提にして、特に石組の溝は大変よく発達しているので、これを使って地区の中でさらに小さな区画単位ということを意識されたのは今回のまとめ方だと思う。この辺の有効性と言うか、それがまず、そのような方向で問題ないのかどうか確認できるかどうかということ、その辺が１つ、１番最初の作業の前提になっている。その辺りについても意見をもらえたらと思う。区画Ｊを見ていると、Ｊダッシュと Ｊ地区のところで、目の錯覚かどうかわからないが多少、建物軸が少しずれている。これは全て軸が一緒だったのか。溝そのものも区画Ｊのところの東側の大きな溝は、Ｊの西側で軸とそれから掘立と礎石の大型の建物との間の溝そのものも少し軸がずれているような気がする。あまり今日まで、建物とか溝についての軸の問題が語られてこなかったと思う。溝が区画というか、全体の中のそのように小さな空間を切っているのは、すごく良い論点だと思う。その中で、溝そのものの軸も少しずつ、東西溝とそれから南北溝とずれているし、それに引っ張られて、区画ごとに建物軸が違うようにも見える部分があるが、その辺りはどうか。

事務局

そこまで検討は進められていない。

部会員

例えば、J、Ｊダッシュのこの図の場合は、右上のピンクで置いてあるものの外側まで表現してある。だから南北の、ここの部分の溝というのは、この右上の全体の区画の間に入っている所か。

事務局
　はい。そのとおりである。

部会長
　本当であれば、溝の上に区画線が来る。おそらく地区を切っているということだから、分かりやすく溝を潰さないように、このような形で切っているということで良いか。

事務局
　はい。全体の区切りが分かるように、ちょっとオーバーラップして表現している。

部会長
　その溝ごとに切られている、このまとめ方がすごく良かった。その小さな単位の区画の中にどういう遺構がどれだけ分布していて、どういう関係なのかということをこれごとにまとめていただくと、全体の細部の要素と言うか、構成ができてしまうようなものだ。今、豊後府内の大友館で、館の中の区画の中のさらに小さい区画を色々議論している。大分市に、何か参考になるようなコメントがあれば、これを見て羨ましいとか、それとも、もう少しこういった分析もしたらどうかと言うものがあれば聞かせてほしい。

オブザーバー（大分市）
　大友氏館ではまだ検討中の部分があるが、部会長にご指摘、ご質問いただいた件で、今、メッシュを全体30mないしはさらに小さい方眼を作って、それを被せる形で、小さい区画の中で、何かそういったものがこう表現されているのではないかということで、その整理をしているところだ。どうも30mメッシュでやってみると、大きな区画で各空間の機能とか、分布している遺構がだいぶ整理できてきているという状況である。一部はまだ検討中である。それから、大友館の中は平地にあるが、全くフラットではなく、空間ごとに40cm、50cmの段差があるので、その30mメッシュの整合性が取れてきている。今、検討段階であるが、段々それが分かってきているという現状の報告になる。以上である。

部会長
　ありがとうございました。大変良いことを思い出してくれた。今の大分市の方の意見というか、やってることをさらにここに向ければ、溝で区画されているこの溝単位ぐらいに、例えば計画単位というか、あの溝を含めた大きな、１つの曲輪の中のさらにこういう区画ごとに計画性があって、このようなものが、溝がこう作られて空間が切られているのかどうかということの計画性を見つけると、全体像がすごくよく分かる。だから、そのような少し粗いメッシュを１回、少し細かいメッシュみたいな形でこの空間分析を

もう１回されると、まだ掘れていない所も含めて、おそらく曲輪全体の空間の計画性が見えてくるのではないかというのが今の指摘である。ぜひ、それを生かしてほしい。

事務局
ありがとうございます。

事務局
なぜ30m間隔なのか教えてもらいたい。

オブザーバー（大分市）
今まだ発掘調査中だが、大友館正面が東側になるが、その外郭の遺構が今出てきている。一応築地という分析をしている。その門が今３か所検出している。推定大門、推定小門としている。もう１つ門がどうもありそうで、開口部があるということで、その開口部の距離が、30m間隔と60m間隔ということが30mの根拠である。その東外郭から中心建物の東に１つ、中心建物域を区画する外郭の溝があるが、その溝と東外郭の門との距離がちょうど30mというところで、どうも30mというのが多分１つの基準になるのではないかということで、30m間隔にしている。以上である。

部会長
さらに加えると、朝倉館も実は同じように30mメッシュを入れていくと、主要な曲輪全体の形、全体の空間の計画性が全部出てくる。門の位置だとか、主要な建物までの距離だとか。今回のこの溝で切られているこの空間性も、多分それを超えて大きく、曲輪全体の中での計画に基づいて作られているはずなので、そのようなことがわかると、色々と空間的に見えてくると思う。研究会みたいになってしまったが、もし、何か具体的な質問などがあるならお願いしたい。それから、水平的な図になっているが、垂直的なレベルの方を考えた時には、どのような状況なのか。水平のレベルとほとんど同じだと思って良いのか。

事務局
発掘調査時は、一面としての調査をしており、そこの前後関係を今ピックアップはしている。面として違うところについては、１番最初に提示させていただいた赤と青の線と、今のところはそこで１つ分けている。

部会長
上層下層が切り合いでと言っていたが、絶対レベルとしては何か大きな差があるのか。多分それは整備の時の問題にもなってくると思う。

事務局

北東に向かって急に下がっていくような状況である。南側については、地山の関東ローム層が広がっているので、全体としては少し高い。ただ、その分、上層が削られている可能性があるので、検出面としては少し検討が必要だが、礎石の検出状況を考えると南側、南西の方が高くて、北東に向かって少し下がっていくような地面になっている。

部会長

そうすると、遺構面そのものを出すにせよ、復元的に上に整備し直すにせよ、多少そのようなものをやはり反映させる必要があると思う。真っ平に作るわけにはいかないということだ。その場合のレベル差というのは、北東側が下がっていくとのことだが、どのくらいのレベル差なのか。今検討しなければ出ないような数字だったらいいが。要するに、簡単に言えば、真っ平な感じでこれがさらっとできるのか、それとも、ある程度勾配をつけたり、あるいは、大友氏館のように中心部は高いけれども周辺部は２段、３段とかなり低くなっていくみたいに、垂直的な意味でのその変化があるのか。それによってだいぶ整備イメージは違うような気がする。そのようなことが確認できればと思った。それはまた整備した時に排水の問題と関係してくる。

事務局

後で現地に来ていただくので、そこでまた聞いていただければと思うが、南側の池の検出面の天場石がだいたい標高 13mになっていた。２号池の石組みの天場石が 13mである。現在発掘調査をしている北東部の北側では、標高 13mの部分だと、寛永 10 年の遺構面から少し下がったぐらいの状況なので、戦国期の遺構面はそれより下に潜っていると言うことができる。その高さの差は 20cm ぐらいあるが、大きな段差がつくようなことはないと思われるので、緩傾斜か、そのような感じで下がっていってるようなイメージで考えている。

部会長

整備をする時、やりやすい。池に向かって溝や全体が落ちていってくれるし、平地そのものも排水というか、水はけの問題から言えば、強く一方的に向かっていくほうが、非常にやりやすいと思う。コンサルタントからも、整備のイメージを考えた時に必要な、そのような遺構に関して質問したいと思ったことを言っていただきたい。現地を見たときでも構わないが。

コンサルタント

皆さんにご意見を伺いたいと思う。今回、上層と下層の模式図の作成をお手伝いさせていただいた。教えていただきたいのが、今回整備する範囲の将来的な形について、遺構の情報として充実している所をそれぞれピックアップして作っていくという方向で良いのかどうかというところである。具体的に話をさせてもらうと、例えばＩ、Ｌの所だが、下層に掘立柱建物が建っている。上層は、かわらけ廃棄土坑を確認している。私の認識からすると、廃棄土坑が出てきたということは、下層の方は、この区画の中、充実した範囲だったのだろうということで、整備するならば下層が良いと個人的には思っている。そのような話がまず１点ある。今回決めるというわけではないが、そのような考え方で判断してよろしいかどうかということがある。次のページにあるＪ、Ｊダッシュの場所だが、これは結構個人的に難しいと思うところは、この建物が改修されている所がある。この建物は建った瞬間が最も良い時期と捉えるべきなのか、改修された時の方が充実しているとする判断になるのかという問題がある。それぞれの遺構の前後関係で上層をピックアップした方が良いところと、下層をピックアップした方が良いところということがあり、その辺りについて、まだ最終確定ではないが、部会員の先生方のご意見をいただきたいと思っている。

部会長

ありがとうございます。大変重要な指摘で、実は多分問題になりそうだと思うところだ。１つは今の問題があったし、もう１つは、２号池が最初に作られた時は非常に綺麗に出ているけれども、最終段階では、ほとんど池の体をなしていない形になっている。よって、見せものとして良いような状況をなるべく各地点ごとに出すような形にするのか、それとも厳密に遺構面での最終段階に限定するのか、その辺り、考え方の問題になるかと思う。これは今日ここで決めようという話ではなく、基本的なそのような考え方についてご意見があれば伺っておくと今後のまとめ作業をするとき大変役に立つと思うので、意見を言ってほしい。はっきり言って、この上層下層の中の時間差は、おおよそどのくらいと把握してるのか。それにもよると思うが、あまり時間差があるものを、見栄えが良いからこちらにするというのは結構抵抗があると思う。あまり時間差がないのならば、色々な議論ができると思う。

事務局

出土遺物でみると、それほど細かくは分けられないが、おそらく 20 年から 30 年である。

部会長

ありがとうございます。

部会員

１番見栄えが良い所だと、やはり１号池がある段階が１番良いかと思うので、あとは先ほどの事務局が話した所で、上層と下層というのは、それぞれの区切りでの相対的なものであって、例えば、Ｋの所では１号池がある段階の下層として、その他の、例えば、先ほど言われたＩ、Ｌの所で、それが大体同時代だとすると、上層と下層のどちらなのかということがどの程度言えるのか。20 年ぐらいなら、どういう感じになるのかと考えてしまう。

部会長

事務局は、どう考えるのか。

事務局

池の段階とか具体的なところで、時期は分かっていて、大体の年代が分かっている所とそうではない所で分けている状態である。それがどことどこが釣り合うかということは、検討しきれていない。まだ上と下に分けただけである。その分、整備しうる面が少し増えてくるかもしれないとまでしか言えない。検討段階である。

部会長

ありがとうございます。ちなみに、他の戦国期の遺跡で言うと、こんなに細かく差を上下関係があるから、どちらかにしようと、あまり悩まない。大体最終段階のところでとなる。一乗谷は最終段階のところで整備しようとなった。実は、一乗谷の最終段階が、作った時のことを考えると 50 年ぐらい差がある遺構が最終的に１つになって、最後に焼けているという状況である。だから、ある意味最後の焼けた段階を見せているという開き直りはできる。他の武家屋敷も同じで、天正元年に焼けた時の面を出しているかと言うと、そうでもない所もある。だから、ここの場合には１つの曲輪という単位になるので、その中で 20 年あったときの、その差をどう表現するんだろう、結構これは難しいと思う。ましてや、隣の地区とこちら側の地区の上下関係がどのような関係になるかという連続性は、分からないと思う。

事務局

まだ少し検討している。

部会長

その辺りは部会員で、それから事務局の考え方をいくつかすり合わせて、基本方針としてはどのような方向でやるのかを１回議論しよう。これは、この方針でいこうと決める以外ないと思う。だから、このような色々な面があると認識した上で、その上で、こう

いった整備を目指すとしたい。この件について、何か他にご意見があれば伺いたい。

部会員

全体を同じ時代で通していくのは極めて難しい。考え方としては、建物であった所の遺構が１番機能していたという考えになると思うが、そこに改修ということが入ると、改修がその機能をさらに充実させたというように考えるのか、あるいは、ある機能を辞めてしまって、別の機能を持たせるために改修したとも考えられる。だから、その辺はどこかで決めることになると思うが、遺構整備そのものは、ある下層のこの時期だとか、その前後で建てた建物が、元々はこういった機能があって、今表現したのはこれだと、その後にこの機能を変えて、このような感じに変わってきたというものをきちんとしたジオラマとか復元図にしてほしい。よくある発掘調査の遺構の図面での表現にすると、一般の人が見ても全くわからない。そういうことをその整備の中に入れ込んでいくような方向でいくと良いのではないかと思う。決断すると思うが、その前後の関係、どう変わってきたのかという説明は必要だと思う。

部会長

その問題はもう一つある。整備として見せる、わかりやすく見せることと、それから、今おっしゃっていたようにジオラマだとかあるいはＶＲなどの方法を使って、そこがどう変わったのかを示した上で、この中のこれだという表現にするのかは、整備だけではない部分を含めた議論を行うべきだと思っている。コンサルタントが先ほど質問を投げかけたが、今みたいな議論でさらに確認したいことがあればお願いしたい。

コンサルタント

この後の段階で、またどう検討を詰めていくかという時に、その方針、やり方が議論の中で分かった。次の段階では、全て基本的に充実した場合はこのような形で、時期差的に厳密に考えた場合はこういった形でということを提示できることが分かったので、大変良かった。

部会長

ありがとうございます。結局、そのような資料を用意してもらい、そのようなシミュレーションをした時に、どちらにしようかという議論がこの先必要になると思う。そのような資料作りを進めてほしい。

オブザーバー（大分市）

今の議論だが、大友館も 14 世紀末からずっと継続してあり、遺構の切り合いがある。今、大友館で検討してレベルを出してるのは、礎石の上面レベルをかなり厳密に見なが

ら、レベル差を確認している。御用米曲輪は、上層下層で各地区で礎石建物が出ていると思うが、礎石の上面レベルがどういう位置付けになっているのかが少し分かりづらいと思う。こちらの上層とこちらの下層は同じレベルなのか、こちらの下層とこちらの上層が違うのか、その辺がこの図の中に１個でも上面レベルがこうあればわかりやすいと思った。それから、先ほど、地形の復元の話が事務局からもあったが、大友館の場合、溝を境にして結構地形が変化しているが、この石組水路でその変化はあるのかないのか、その礎石上面レベルとの整合性というか違いがあるのかないのか、その辺が確認できたら、すごく面白そうだという感想を持った。

部会長

ありがとうございます。資料作りは大切である。御用米曲輪は、大友氏の館より遺構の残り具合が良い。溝が分断されないで石組の溝で底面はわかる。それから、溝の上面も縁石の高さまでわかる。溝は良いことに、かなり長い距離でそれが動いていくので、本来の遺構面というか、それがどういう傾きだったのか、水平だったのか、繋がりがどうなっているのかが全部見えるので、こんな恵まれた資料はない。それによって地区がまた切られているということで、すごく有効な良い材料になってくると思う。神奈川県は何かご意見はあるか。

オブザーバー（県）

私は中世のそのような技術については素人であり、素人的な発言になってしまうが、このような各面の上下差というのは確かに大事であり、報告書作りの時に最終的に生きてくるものだが、整備の時にそこまで厳密にやる必要があるのだろうかと思う。一般の人たちは、庭園と、それに伴う大きな館の姿が見られれば、中世のイメージができると思うので、各面の一体性とか同時性は、報告書で語れば良いのではないかと思う。いかがか。

部会長

今日の議論も大体そちらの方に行きつつあると思う。１番あの曲輪の中で輝いた遺構がメインになり、それに伴って周辺でどのような遺構がセットとして組み込まれていくのかという形でまとめていくのが良いのだろうという議論に大体なったと思う。事務局に説明をとても綺麗にやってもらったので、順調に話が進んだ。もし、今ここで確認するようなことがなければ、一旦ここで休憩を取って、その後、現地で丁寧に遺構を見ながら、少し確認しながらやっていこうと思う。皆さん、何かご意見、ご質問はあるか。今の遺構問題だけでなく、ここでやっておかなくてはならないことがあるか。

事務局

副部会長からいただいたコメントがある。先ほどの上層下層の話の中で、副部会長の中では、要は１番初めに庭園を作ろうと思った段階であろう下層で整備をする方が妥当性があるというお話をされていた。もう１つは、礎石建物が掘立柱になるということは、建築史の立場からすると普通はないとおっしゃっていた。おそらく、古い時代は掘立で、新しくなると割と礎石みたいなところがあるのかと、やや分からないというようなお話であった。掘立柱が後から出てくるケースがあるのか、あるいはないのかというところを先生方のご知見があれば、ぜひ、教えていただきたい。

部会長

私は、割と戦国期の色々なところを見ているが、建物機能によって、礎石建物が全盛の遺跡、地区によって、実は関東だと話にもでないというのはいくらでもあるが、西日本の場合には、大体 16 世紀になると、みんな礎石建物に変わっている。それでも、建物機能によっては、やはり掘立柱をあえて使っているということもある。だから、決して掘立柱と礎石建物の前後関係というのは絶対的なものではなくて、もちろん地区によってはそういうこともあるが、１つの遺跡の中でのその意味というのは、むしろ機能差や性格の違いというように理解した方が私は良いのではないかと思う。また副部会長も交えた時に、そのような色々な問題点があれば議論したいと思う。ただし、副部会長のコメントで確認しておきたいのは、副部会長はどちらかというと、庭園などを整備した段階の遺構にまとめようという意見か。

事務局

そうである。副部会長は、割とある場所がある時期でというように考える方である。ただ、今回の場合、何度も説明があったとおり上層下層で同じ時期に作られたかどうかということではないので、ある年代で作られた、要はそこの遺構が上と下になっているだけである。先ほど上層下層間が 20 年、30 年という話があったが、文献上は、昨年度お話しさせていただいたが、もしあそこに庭園を作るとすると、割と蓋然性が高いのは天正７、８年で、天正 16 年には蔵を作るということがあり、蔵は、もしかしたら今回のところを外した所で作っているのかもしれない。そうすると、本当にわずかな期間でいろんなものが差し込まれていることになる。今日これからＣというところをこの後議論していただくが、 そこは、事務局からも話があると思うが、またその上に大久保氏の何かが、その寛永の下から戦国の間にまた面があるなど、色々なことが起こっている。そこは、Ｃのところでまたご覧いただいて、どう整理していくのかということをお話ししていただければと思う。

部会長

ありがとうございます。副部会長のコメントを聞くことができ、良かった。

部会長
　会議を再開する。最初に事務局の方から説明をお願いしたい。

事務局
　この後は現地を見ていただく。見ていただいた後にまたこちらに戻っていただき、現地で見たものの議論や、先ほどの審議事項の説明をみながら、それに関連したことも議論していただいたり、そのようなことをやりたいと思っている。見学後に再度戻ってくるということで、お願いしたい。

部会長
　では、早速現地の方へと移動する。

（現地視察のため移動）

事務局
　資料で提示した図面をご覧いただきたい。今ご覧頂いているのは、Ｒ５年度調査区で１区とした調査区の西の端部分である。前回の部会の際、１区の東側を見て頂き、ほぼ攪乱であるという状況をご確認いただいた。これまでの調査結果を検証し、攪乱は皆さんの足元ぐらいまでは来ていると想定できた。したがって、掘削調査可能な西側ギリギリの近世遺構の攪乱が及ばない範囲に設定したのが、ご覧頂いているトレンチである。
　調査の結果としては、北側には集石があり、その下層には瓦を充填した暗渠みたいなものがある。これらは近世遺構なので、北側はこれ以上は掘れない。配布資料のＥ・Ｆ区の図面にある石組水路の底石だけだが南側から続いてきている。
　それから、先ほどの事務局の説明からいくと３期以降となる赤い色がついてるところだが、前の調査区でコの字形に回ってる溝があり、その中に建物が建ってる掘立柱建物があった。Ａ４の図面の方では、第４面のところにその建物を復元して書いてあるが、今回の調査で寛永小田原大地震後の盛土層が覆土として入っている状況が確認できたので、一段階新しくして良いと思われる。
　１区の調査での成果というのは、今のところ以上である。何かご質問などがあれば、伺いたい。

部会長
　それぞれの遺構面が全体としてどのように総合的に繋がっていくのか。そこの整理が必要である。先ほど、まとめていただいた各地点ごとの上層下層ではない形で、考えたらどうなるか。

事務局

今日の説明では、便宜的に調査区を分けて説明した。その中では一応、面として調査してきているので、基本的には同じ面で合わせているつもりである。ただ、検出面が一緒なので一緒に調査していているが、切り合いを考えれば複数の時期を想定する必要がある。私の方でも、前回調査時にはあまり理解していなかったが、今回の調査では、近世の土が覆土として入ってる遺構があることを確認した。

また、一段低いのは第一次調査のトレンチで、この下にはさらに砂利面があるようなので、下層にもまだ戦国期の遺構面がありそうである。

北側は、ローム混じりの土が入ってるので、ここからは下層まで壊されている。

今、ベルトで残しているところまでが前回の調査区である。これが前回の調査区壁であり、そこをベルトとして残して調査を行っている。したがって、今回新しく掘れたのは１ｍだけである。近世の米蔵の南側で掘ることができるのは、ここが最後だと思う。今回ご覧いただいたトレンチによって、下層が攪乱でやられている範囲を確認できた。１区東側でも１箇所、駄目押しでトレンチ入れて、下層の様相を確認した。結果、ちょうど追加トレンチの場所を境に、西が壊されていることがわかった。追加トレンチ東壁にだけ、砂利敷きがギリギリ生きていてる。したがって、ここから東は戦国期が生きているということが分かり、環境調査を実施している場所は、戦国期の面は生きていると考えられる。

（２区へ移動）

今、トレンチの壁で確認できる黄色い土が、寛永 10 年の寛永小田原大地震後の盛土層と考えている土層である。その土層まで地割れがいっている場合といっていない地割れがある。そこから、寛永の地震とそれ以降の地震の痕跡ということが想定される。これは今回調査での新しい所見である。

その寛永の盛土層を除いた下に１面あり、そのさらに下で見つかったものが、南西に見える砂利敷と礎石の範囲ということになる。

全体に砂利を敷いており、２間幅で礎石と思われる石が２つ ある。その礎石建物の外側と考えられる右手東側には、見切りのように若干大きめの砂利が敷かれていて、その外側には細かい砂利が並んでいる。軒柱になるかどうかはわからないが、礎石に対して１個ずつ石があり、その外側には砂利が抜ける雨落ちのような溝状の遺構がある。

これらが、ひとつの建物空間の構成ということになると考える。位置については、先ほどの資料のＣのところのトレンチ、Ｒ５年度調査区２区というところを見ていただくとお分かりいただけると思う。東西両サイドのＣ・Ｄのところの前回トレンチ見ていただくと、今回検出の建物と対応するような遺構は出ていない。これは大きな問題である。部会長からも散々ご指摘いただいているが、どの面と合うのかというところは謎である。したがって、ベルト外し繋げて掘らないと全体像が把握できないと思っている。

部会長
　今以上に掘ることは可能なのか。

事務局
　可能だと思う。砂利と礎石の空間が検出されたことで残したところ以外は、全体に硬化面が広がっているのみで、目立った遺構はなかった。そこを下げた所に１枚、硬質の硬化面があって、さらにその下で今ご覧いただいている遺構検出状況が見えてきている。掘り残した砂利敷きの建物からは、瀬戸・美濃窯の志野製品が出ているので、16 世紀の末から 17 世紀頭ぐらいの遺構と考えている。
　右手奥の少し深くなってる所に石が並んでいるが、あれが前回調査で確認している 16 世紀代の石組水路の続きである。これを追いかけていき、東西で合流してくれれば良く、合流しなければ改めてもう一面の存在を考える必要があるかもしれない。それを想定しつつ、現在は南側から調査を進めているところである。
　現状、北側にも砂利敷遺構が見えているが、調査の過程では南側と同じ面だと思って調査をしていた。しかし、壁面を精査し、セクションを引いて追いかけてくると、南側の砂利敷遺構より下層になってしまう。

部会長
　細かいところでレベルがギリギリだ。

事務局
　井戸も１基、確認している。あの井戸は、寛永の盛土層の下から見つかっているが、この建物との関係でみると、建物を壊している。さらに、部会長からもご指摘いただいたが、井戸の天板の石は失われている。井戸覆土中には寛永小田原大地震後の盛土が入っているため、井戸については上が飛ばされてると考えた方が明確だと思う。そうすると、寛永の地震の面より下に井戸がある面、砂利敷・礎石を持つ面、硬化面、石組水路が展開する面という４面が想定できてしまう。実年代で言えば、1590 年から 1633 年までの 40 年の間に、これだけの面を収めなくてはいけないような状況である。
　また、先ほども申し上げた通り、手前の地割れは黄色い盛土の下で完全に止まっている。隅にある地割れは上まで上がっている。前回調査の時は黄色い盛土を超える地割れは見つけられていなかったので、その地割れはみんな寛永 10 年の地震だと思っていた。しかし、当然小田原では寛永 10 年以降にもたくさん地震があるので、もっといくつかの地震に伴う地割れがあると考えている。
　地割れも東に向かって数㎝ズレて下がる状況なので、砂利を追いかけていてなくなったかと思うと、出てくる。右手の方に拳大の玉石が集中してる部分があるが、追いかけて

いくと、砂利は玉石の下に潜っていきそうで少し怖い。ただし、ここで地割れがあるため、地割れで段がつくのかどうかを今検討している。

部会長
地震は面倒である。

事務局
砂利は結構叩きしめていて、きちんとはまっているところもある。それに対応するであろう礎石状の石は、今のところ１個だけである。礎石らしいものがあるだけである。

部会長
抜け跡みたいなものは出ているのか。

事務局
丸く抜けているところがいくつかある。

部会長
礎石がなくて、抜けている穴があるということか。そのようなものが礎石の据えた跡と考えられるのか。

事務局
今まで６尺２寸５分で合わせてきたものが合わなくて、その辺を苦慮している。

部会長
時期の問題で、同じ時期と言っても、遺構面単位に無理矢理詰め込むのではなく、結構同じ時期の中で作り直ししたり、砂利を敷き直したり、他の所には敷かなくても、ここだけは敷いたというようなちょっとしたレベル差だから、本当に遺構面の違いなのか。それとも、ちょっとした空間の違いなのか。

事務局
ご指摘の通り、地割れによってこれだけズレていると、肉眼で見えるレベルの高さと実際のレベルは異なってくる。壁に黄色い水糸を張っているレベルが 13mである。それを参考にしていただくと、確認面が一様でないことがわかる。

部会長
サブトレンチを入れて、下を覗こうとかはしないのか。

事務局
　できるだけ、サブトレンチは入れないでなんとかしたいと思う。

部会員
　地割れの方向はどうなっているのか。

事務局
　地割れの方向は、大体南北である。最初掘ってる時は、時期によって割れ方が違うのかと思ったが、掘ってくると、南北のようである。

オブザーバー（大分市）
　そんなに地割れがあって、地割れを起こしやすい場所なのか。

事務局
　はい。全部盛土なので。天正 16 年に百間蔵の用材を集めている文書があり、その時に百間蔵を建てたと考えていた。前の調査で確認した第３面の細長い建物は、百間蔵ではないかと考えて調査をしていた。しかし、今回の調査で戦国期の居館跡に伴う石組水路の面の上に多くの遺構面が存在して寛永小田原大地震を迎えるとの変遷が確認できた。御用米曲輪自体の変遷を少し再考を要するのではないかと思っている。簡単に蔵にはならないのである。

部会長
　その間があるということか。

事務局
　「正保図」には、御用米曲輪の場所に「百間蔵」と記されているので、ここに百間蔵があったと考えていたが、百間蔵が建てられたのはここではないかもしれない。
　副部会長も、なぜ御用米曲輪のような広い空間に蔵しか建たないのだろうかということをおっしゃっていた。やはり御用米曲輪自体に、居館跡であったという空間的な意味合いが伝わっていたのか、あるいは池が残ってるだけでぐちゃぐちゃで使えなかったのか、これだけ広い曲輪の中で、真ん中に３棟、ぎゅうぎゅう詰めの３棟しかないということはどうして生じたのかということを考えないといけない。

事務局
　では、皆さん、会議室へ戻っていただきたい。

（現地から戻る）

部会長

それでは、会議を再開したい。今、現地の方で遺構Ｃの石組を見させてもらったが、複雑で難しい所を見たので、もしご質問、あるいはコメントなどがあったら出していただいて結構である。今日現場を見せてもらい、事務局も認識されていたが、すごく細かいレベル差で遺構面が精細に重なっている。それから地震を受けてからか、またそれがさらに１つの面もずれている。当然あるべき隣を掘った時に出てきた石組の立派な溝が、今掘っている場所には出てこないという問題がある。本当にないのか、レベルのずれで下に隠れてしまったのか、もう少し堀下げなければならないのかということが出てくる。隣にあったら、溝が止まるにしたとしても、きちんと止まるはずである。見えないというのは変である。だから、やはり調査としては、前にも言ったが、前に掘った遺構を一部隣接している所を出した方がいい。そして、その遺構をすごくアナログ的だが、出した上で今度の新しい発掘調査区との関係を見ないといけない。レベルをあまり信用したら良くないと話していたが、色々な理由で昔のレベルは変動していて、使えないくらいずれることもある。だから、あるはずのレベルだと言っても、それはあてにならないという感じがある。ぜひ、隣接していた調査区を１回、一部出して繋いでみることが必要だと思う。大分市の２人から何かあるか。

オブザーバー（大分市）

先ほど言った礎石の上面レベルでの比較については撤回する。御用米曲輪では調査が困難である。申し訳ない。

部会長

礎石を据えている石敷きの面を含めて、すごくしっかりよく残っている。恵まれている遺跡だと思う。

オブザーバー（大分市）

調査する立場から言えば、御用米曲輪は遺跡の難易度が高い。驚いた。

部会長

事務局が現地で確認しながら言っていたが、やはりあるはずの遺構が見えないということで、それをアナログ的に隣の調査区と繋げることをやらなければならないと思う。だから、少し隣接してる発掘調査区については、前の発掘調査区を出して、そしてアナログで作業をやる以外はない。そのようなことは可能か。

事務局
　来年度までのスパンの中ならば可能である。

部会長
　新しい発掘調査区だけつぼ掘りしていると、よく分からない。隣の発掘調査区を全部掘れとは言わないが、隣接部だけでも掘り直して、そこから繋げていくことが良いのではないかと思う。大分市の方からも非常に難しい発掘をこなしているとお褒めの言葉があった。コンサルタントから何かあるか。

コンサルタント
　発掘調査で出てきた遺構の前後関係が分かり次第、もう少し検討できればと思う。

部会長
　コンサルタントの先ほどの話にもあったが、何をどのような情報を作れば良いか、どのように情報を整備すれば良いかということが大体見えてきたような気がする。だから、その辺をしっかりやっていただく。もう１つは、先ほどの大分市の話ではないが、平面プランの中にメッシュを載せると計画性がどのように見えるかどうかという、計画的な面の取り方、溝を配置した空間の積み方のような検討もした方が良いと思う。その辺の情報を少し見せながら、次に向けて用意してもらえたらと思う。部会員から指摘したいようなこと、あるいはアドバイスがあればお願いしたい。

部会員
　質問がある。建物とか水路など百間蔵の位置も非常に難しい話だということを今日お聞きした。私の担当の植物のことや植栽のことは、全く情報が出てこない。それどころではなさそうであるが、復元するにあたり、植物の情報も必要になってくると思う。その辺り、事務局はどのように考えているのか。

部会長
　事務局で何かあるか。植生復元の情報は作れないかという、おそらくそのような要求だと思うが。

事務局
　部会員もご存知の通り、前回の発掘調査で池とかで花粉などを回収できる所はいくつかサンプル調査をした。今回の所でも戦国期相当の遺構で石組水路など条件が合う場所があれば、採取は可能かと思う。ご指摘いただいたことに注意して進めていきたい。

部会員
　花粉のみの分析か。

事務局
　種子もある。

部会員
　花粉だけだと広く飛ぶので、庭の植栽を考える上ではなかなか難しい。

部会長
　周辺の飛んでくる多い花粉が検出されてしまうことが問題だ。これまでの庭園だとかで限定的に植生の分析は出来ているのか。

事務局
　御用米曲輪では、井戸と堀からサンプルを取っている。その他、隣接の市街地の発掘調査でも何箇所かで分析データを取ってるところがある。それと照らし合わせて比較して、どのようなものがあるかということを検討したいと思う。前回の調査では、２号池からツバキ属、サクラ属、ツツジ属などが比較的多く出ている。庭園樹木として考えられる。できるだけサンプル数は多いほうが良いので、部会員と相談させていただきながら決めていければと思う。

部会員
　承知した。

部会長
　部会員からもう少し積極的に、このような資料を作ったらどうかと注文をつけてもらえたら良いと思う。発掘している時でないとそれは作れなくなってしまうので、調査をしている最中に、このようなデータを挙げた方が良いなどと言ってもらえればと思う。

部会長
　それでは意見も一通り伺ったところなので、この遺構の分析報告については、ここで一旦終わりにしたいと思う。

事務局
　本日は長時間に渡りありがとうございました。なかなか、現地を見ていただいて、悩ま

しくなっていることがお分かりいただけたかもしれない。今日いただいた宿題を次回までに整理をさせていただきたい。この後、12 月の末に史跡小田原城跡調査・整備委員会がある。前回いただいている整備の方針と言うか、近世と中世でやるのか、あるいは戦国期でやるのかというところを少し史跡小田原城跡調査・整備委員会の方に投げかけさせていただければと思っている。そこで決めるということではないが、とりあえず、少し議論をしていかなければいけないと思っている。そのような形で進めさせていただきたい。

部会長

最後の問題だが、基本的にこちらの部会の方で、やはり方針をきっちり決めて、こういう方針で臨むからよろしくという形にしないといけない。史跡小田原城跡調査・整備委員会の方で、どちらを取るかということをしてしまうと、その主導でやらざるを得なくなってしまう。そういう議論を部会の方では今年度中に詰めるという方向の話にしてもらえるか。

事務局

承知した。

部会長

史跡小田原城跡調査・整備委員会の方はどう考えると聞いてしまったら、聞いた以上尊重しなくてはいけなくなる。無視はする気はないが、基本的にはそういうものだと思う。そこだけはお願いしたい。

事務局

承知した。本日は、ありがとうございました。